季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

夏号

2002

6,7,8月

◉特集◉

1 米山をめぐる民俗文化

2 報道のなかの祇園祭

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

2002年☆直江津の旅？

春日山で遊ぼう

ミニ特集

史跡めぐりと
自然が楽しめるゾ！

知の楽しみ

雪国固有と呼ばれる植物

フリースペース

山を楽しもう

―中高年向け安全登山のすすめ―

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

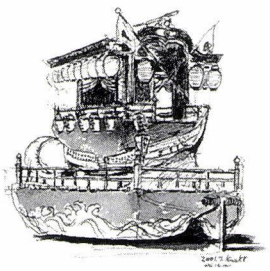
本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

直江の津

第六号　夏号
二〇〇二―六・七・八

特　集1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一　4
特　集2　報道のなかの祇園祭　12
巻頭エッセイ　2002年☆直江津の旅？　魚家明子　3
知の楽しみ　雪国の固有とよばれる植物　長谷川康夫　20
フリースペース　山を楽しもう　永島賢司　18
ミニ特集　春日山で遊ぼう　16
講　演　信頼回復なくして景気回復なし　割田満　24
読書びと　『イワナの夏』湯川　豊著　23
見る目　小林古径邸の美しさ　28
東西海陸　22
こんな人　11
読者から・バックナンバー　30



岸田國昭・絵

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。

2002年☆直江津の旅？

魚家明子

上越市民になってからはや三年がたった。来る前は、自分は「上越市」にひっこすのだ、と思っていた。けれど、ひっこしてみて知ったのは私が「高田」にこしてきたということだった。「上越市」ではなく「高田」と「直江津」。世界はその二つの帝国でできていた。しかも「高田っこ」と「直江津っこ」は、ある種の敵対心をお互いに持っているように見えた。負けへんでえ～（なぜか大阪弁）、というような。実際はそんなにひどい争いでもないのだ。だが、お互いに「高田気質」「直江津気質」があるのだ、と、頑として信じ込んでいるような向きは確かにあるだろう。

私は嫁いで「高田っこ」になったものだから、なんとなしに直江津は遠い。

先日、直江津で飲み会があった。一時間以上も前に着いてしまったので、直江津を歩くことにした。……空気が、きりり、としていた。

何だろう、たとえば高田公園の周辺を歩いているとき、なんとなく空気が穏やかでまるい感じがする。（あくまで私の感覚です。）直江津は、空気がきりりとどこか鋭角なのだ。もちろん、悪い意味ではない。すがすがしい、身のひきしまるような、清冽な「きりり」なのだから。身体の中に溜まったものを吹き飛ばすようなさわやかさがあった。

海が近いせいかな……とぼんやり思いながらもくもくと歩く。途中、神社があるので行ってみる。鳥居の中に飲み屋がある。へええ……と感心しながら神社の段を上がり、思い切り柏手を打つ。パンパン！ふと視線を感じて中を見ると、ほうきを持ったお母さんが目をまるくしておられる。平日の夕方にこんな若い（？）子（？）が、神社で柏手を打っているのはめずらしかっただろうか？　ぺこりと頭を下げ、その後、目をつむりお参りする。二礼二拍手一礼だったかな……？　脇の方から学校帰りの女の子達が笑いながら歩いているその声がする。夕暮れは静かにやってくる。

神社を出、さらに歩く。川に着く。川は、長く、大きく、静かで、やはりそこには「きりり」とした空気が流れていた。三秒見てきびすをかえした。車の中の知らないにいちゃんが目を丸くしていた。……それ以来、やっぱりあんまり直江津には行く機会がない。

（上越市在住・詩人）

特集

米山をめぐる民俗文化

■渡邉三四一　わたなべみよいち

祈る　仰ぐ　登る



「越後国頸城郡絵図（部分）」（米沢市「上杉博物館」蔵）

■はじめに

頸城と刈羽の郡境に立つ米山（九九三メートル）は、古くから薬師信仰の霊山として知られます。その単独して聳える秀麗な山容は周辺や沖合から神々しく望見でき、山中の雑木林は山麓に豊かな水を供給します。火山でも高山でもない米山が、霊山として信仰される理由がここにあります。

山高きが故に貴からず、樹有るを以て貴しと為す―。米山がどのように貴い山かを、山麓民との具体的な関わり方を通して、考えてみたいと思います。

一、仰ぐ山

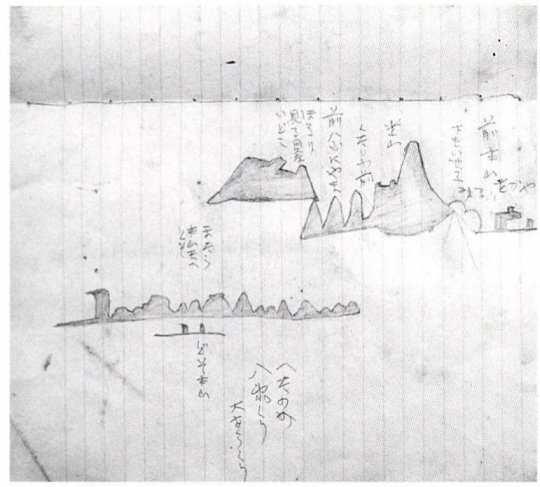
――米山へのまなざし――

頸城平野と刈羽平野に囲まれ、日本海に面した米山。山麓周辺の人々にとって、米山は身近に仰ぎ見る山として存在します。その「まなざし」は、単なる景観としてのそれではなく、様々な経験知を重ねた民俗文化として伝承されてきました。

漁民の山当て　今日のようにGPSのない時代、漁民は「山当て」（山たて・山合わせとも）という技術で、自分の舟や漁場の位置を確認したものです。周辺の漁師にとって日本海から聳え立つ米山こそ、この山当ての中心となる重要な存在だったのです。米山とその周辺の山並みの重なり具合、岬の鼻との位置関係など、漁師それぞれの覚え方で水深や漁場が記憶されます。柏崎市番神の漁師が作成した「山見の図」や「漬場絵図」は、その具体的な資料です。「山見の図」には大きく米山の姿が描かれ、周辺の山や岬が描かれます。高級魚のオヨ漁は漬場という人工の魚礁を仕掛けますが、その位置を記した絵図には米山をはじめとした陸（おか）の山並みが描かれています。山々との位置関係により漁場が配置されているのです。漁師にとって米山へのまなざしとは、その生計維持に不可欠な技術だったことが理解できます。



海上から見た米山



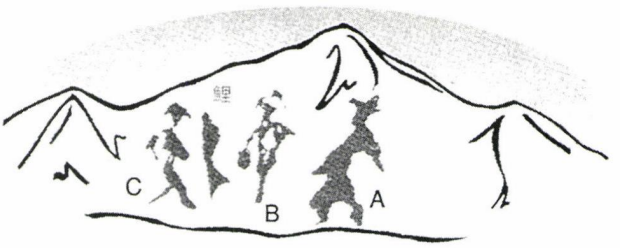
ノートに書かれた「山見の図」（柏崎市番神）

暦としての雪形　四月下旬から五月初めにかけて、米山の雪消えは一気に進みます。ちょうどこの頃、柏崎から米山を見ると、残雪の白と地肌の黒が織り成す「形」が浮かび上がってきます。スジマキ男（爺さん）とコイガタ（鯉形）と呼ばれる雪形（ゆきがた）です。かつて水苗代の時代、このスジマキ男が出現すると種籾（すじ）播きをし、苗代準備に掛かりました。しばらくするとコイガタもはっきり現れ、農民はその姿の善し悪しで稲の豊凶を占い、漁民は春イワシが来ることを知りました。まさに自然の暦です。おもしろいことに、米山の雪形伝承は柏崎側に濃厚で、柿崎側には稀薄です。それは仰ぎ見る米山の斜面の違いからくるものと考えられます。つまり柏崎から望む米山は北側斜面であり、この時期まで雪をよく残します。一方、柿崎側からの米山は日当たりの良い南西面で、ほとんどの雪は解けています。それでも柿崎の農民は、山頂部にわずかに残る雪の量で、その

年の水の多寡を判断しています。米山の残雪をめぐる東と西の地域差の一つと言えます。

「仰ぐ」という山麓民の素朴な行為には、かくも重要な文化的意味が存在していました。そう言えば、三階節にある「米山さんから雲が出た…」という歌にも、米山に笠雲がかかると、やがて雷とともに夕立ちがやって来る、という先祖の知恵が隠されています。





雪形を描く米山（柏崎市荒浜より）
米山のコイガタとスジマキ男の３（Ａ・Ｂ・Ｃ）タイプ
（力石春美氏作図：柏崎市立博物館特別展図録より）

二、祈る山

――治病神・農業神・航海神――

米山信仰の内実を大雑把にとらえるとき、次の三つの性格を挙げることができるでしょう。一つは、薬師信仰に根ざした病気平癒の信仰、二つは農民を中心にした作神（農業神）信仰、そして三つ目に沖行く海民による航海安全の信仰です。

治病神

米山の本尊は薬師如来。別当寺である米山寺密蔵院（柿崎町下牧）の伝える「米山畧縁起」によれば、和銅五年（七一二）に加賀白山を開いた泰澄禅師が薬師如来を祀ったとします。後年、日向の法華嶽寺の薬師、三河の鳳来山峯薬師とともに日本三薬師の一つに数えられ、『三国名所図会』（天保年間）には和泉式部がこの三薬師に病気平癒を祈願した逸話が載ります。密蔵院護摩堂には、病気治癒を願う絵馬や額が奉納され、なかに眼病治癒を祈った「め」の字の絵馬も見られます。そのためか密蔵院では大正期頃まで、目薬を調剤し信者に頒布したといい、現在もその時使用した薬研が残されています。米山薬師はことに眼病に効くとされ、この目薬も信者の要求に応える活動だったのです。

ところで何ゆえに、米山に薬師如来が祀られたのでしょうか。この素朴な問いにヒントを与えてくれるのが、吉田東伍編纂『大日本地名辞書』に記載された『大同類聚方』（九世紀成立）の記述です。同書は古代における地方の古医方を集録したもので、そこには「恵奈山薬越後国、三志摩雄ノ家伝也、元者少彦名神方也。浮腫の胸苦く、小便下らず、吐て急り痛む者に與ふ、まつほど（茯苓）えびやす（芍薬）はじかみ（生姜）とりかぶと（草鳥頭）五味粉にして丸め」と、米山の薬と四種の生薬の処方が記されています。

ここで思い出すのが、米山山中に自生する当帰（セリ科の薬草）です。その根は古来から生薬の原料として珍重され、特に血病の要薬として婦人病に処方されます。強壮剤や緑内障治療にも効果があり、薬師の山に相応しい産物です。『大同類聚方』の「恵奈山薬」は、この「当帰」のことではなかったでしょうか。この仮説を補強するのが、米山山麓の里山伏であった田辺六右衛門家（柏崎市田屋）に伝



里山伏製剤の「阿蘭陀五香湯」



米山自生の当帰

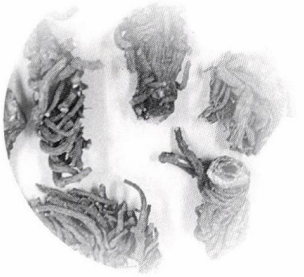


山頂で当帰を売る人

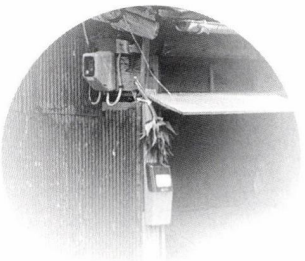
泰澄大師



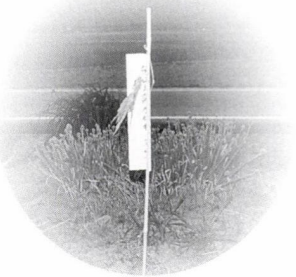
能生白山神社蔵



当帰の根



軒先に下げられた当帰の葉（柏崎市）



当帰を添えた虫除けのおれ（中之島町）

わる米山信仰に関わる版木です。その中に「阿蘭陀五香湯」という薬の版木が含まれ、その効能は当帰を主成分にした現行漢方薬とほぼ一致します。しかも五種の生薬を調合したもので、『大同類聚方』の処方にも通じます。山岳修験の霊山に温泉や薬草が伴うことはよくあることで、修験者はその方面の知識に長けていました。米山に薬師が祀られた本源的理由に、この米山名産の薬草・当帰があったのかも知れません。

農業神　米山は山麓の農村にとって水源の山です。柿崎町の登山口に「水野」という集落がありますが、ここでは米山を「水元山」と呼んでいました。また「水下三七か村」という呼び名もあり、米山の水の恩恵を得る柿崎の村々では、戦前までは密蔵院の薬師講に必ず代表を立てたということです。山中にある雨乞い信仰の「七塘池」も同様で、農業神としての素朴な米山の姿がここにあります。ところが近世中期以降、県内の農村平野部を中心に急速に「米山講」が組織され、各地に米山塔が造立されていきます。現在確認できただけでも四〇〇基の数に上ります。文字通り、米山は「米の山」となっていったのです。この急速な普及の裏には、どうやら修験者たちの宣伝活動があったようです。『越後名寄』（宝暦年間成立）という文献の「当帰」の項に次のようにあります。「山ノ絶頂ニ薬師堂有、四月八日ニ群参ス。其頃處々ノ修験者、村里ニ徘徊シ宝螺ヲ吹鳴シ、米山代参ト云テ銭米ヲ受。下山ニハ為土産當皈（当帰）ノ茎葉ヲ贈ル。凡長サ二尺計ニテ櫃ノ中ニ置ハ虫ヲ去」。ここには米山信仰を布教

し、米山代参により生計維持を計る里山伏の姿が彷彿されます。興味深いのは、彼らが当帰の茎葉を土産に持ち帰り、それをお櫃（米櫃・衣装櫃）の虫除けとして信者に与えている点です。今日でも当帰の茎葉は、米山周辺地域では戸口に下げて厄病除けとされたり、竹先に結わえて田んぼの水口に立て稲虫除けの呪具とします。こうした当帰をめぐる習俗の原形が、すでに『越後名寄』の修験者の米山代参にみられるのです。米山塔の造立が同じ宝暦期に開始されることも、おそらく彼ら修験者の活動を受けてのことと考えられます。

航海神　室町後期の『宗安小歌集』に、次ような不思議な米山の歌があります。

「米山薬師堂のつりがねの緒になろうよ　なろうよ　三度捧げられて振られて　拝まれようよ　拝まれようよ…」。この歌には、どんな意味が隠されているのでしょう。中世歌謡研究の植木朝子氏は、中世の港町・柏崎で船人を相手にした遊女の歌が海を渡って京に伝わったものと指摘します（「変身願望の歌」『日本文学』四六、一九九七）。その背景こそ中世海民による航海神としての米山信仰でした。客である船人に崇敬される米山は、遊女にとって羨望の対象であり、その屈折した思いが先の歌に込められていると言います。

確かに室町期の能『身売』にも、船頭の誓約の場面に米山が唱えられ、また綾子舞の狂言「佐渡亡魂」でも、波風を静めるため近隣諸国の霊仏霊神とともに、米山薬師が唱えられています。こうした中世文芸からも、海民に絶大な指示を得た航海神としての米山が理解できます。それは米山が日本海に面した秀麗な山であったことと深く関係しているはずです。この海民の米山信仰は『北越雪譜』の「龍燈」の逸話や大清水観音の龍燈杉の伝説を生み、やがて佐渡情話の原形となる常夜燈伝説の母体ともなります。そして今も密蔵院では、近隣の漁師へ「海上安全守」の御札を発行しています。





右　海上安全のお札
（米山寺密蔵院）
左　船頭中造立の米山塔
（柏崎市番神）

三、登る山

――生れ変わる思想――

別当密蔵院が明治期に配布したと思われる青摺りの米山図は、霊山としてのコスモロジー（宗教的世界観）を知る上で貴重です。そこには二つの結界の存在が読み取れ、さらには山岳登拝の意味をも教えてくれるのです。

二つの結界　米山の登山口は現在五つ。うち古くからある柿崎水野口（表口）、柏崎吉尾口（裏口）、同野田口の起点には、「払（祓）川」が流れています。俗界のケガレを祓う、いわば禊（みそ）ぎの場です。丁寧な人は薬師堂に捧げる賽銭もこの水で洗い浄め、さらに新しい草鞋に履き替えて山頂を目指しました。払川より先は「聖域」であり、その指標が払川だったのです。密蔵院「米山図」には、払川を越えると「西ノ川原」という地名が現れます。これを「賽の河原」と読めば、これから行く先が「あの世」であることが知られます。

米山が山岳修験の霊場であったことは、吉



密蔵院発行の米山図（明治期）

西ノ川原やシラバの名が見える



吉尾口の払川



柿崎口の女シラバ跡

尾口六合目付近にある「山伏岩」からも窺えます。ゴツゴツしたこの岩上で、山伏たちは修行したと伝えます。また各登山道の八合目付近には必ず「女尸羅場（しらば）」と呼ばれる女人堂が設けられました。明治初期まで、これより上は女人禁制で、女性はここで願を果たしました。昔、この禁を破った尼僧が山の怒りに触れ、石に化したという伝説が山麓の村々に伝わっています。米山は「聖と俗」「男と女」という二重の結界を敷き、その霊性を主張してきたわけです。

生れ変わる山　山中に「賽の河原」があるのは、山岳登拝の本義である「擬死（ぎし）再生」（仮に死んで生れ変わること）を教えています。かつて近郷からの登拝者は夕刻に出掛け、登山道は松明の行列が続いたといいます。山頂の休み小屋で夜明けを待ち、ご来光を拝むためでした。ご来光とは、生命力を更新する象徴的な仕掛けだったのです。

いま一つ、米山の「生れ変わる」習俗に、山麓周辺の子供たちによる十二歳の初参りがあります。数え十二歳になると近隣の男子は米山へ登るものとされ、無事に下山すると「一人前」と認められました。翌年には「礼参り」も行われました。いわば「成年式」の登拝で、子供から大人へ「生れ変わる」ための通過儀礼であったわけです。いまもこの伝統は、近隣小中学校の集団登山として受け継がれています。

■おわりに

「仰ぐ」「祈る」「登る」をキーワードに、米





上　学校での米山登山（昭和 30 年代）
左上　米山山頂から見るご来光

山をめぐる民俗文化を概観してきました。

そこには山麓民の様々な生業や生活場面に深く関与する姿がありました。米山の貴さとは、火山や高山とは異なる「秀麗さ」と「親近性」にあったと言えます。山麓民から親しく「さん」づけされるのも、誠に頷ける気がします。

■プロフィール
柏崎市立博物館学芸員。一九五七年柏崎市生れ。國學院大学経済学部卒／日本民俗学・民具研究専攻。一九八六年から現職／新潟大学人文学部非常勤講師。
主著　『米山信仰～山とひとの民俗宇宙』（特別展図録）など
共著　『日本民俗学―フィールドからの照射』雄山閣一九九三（同書掲載の「浜下駄とその環境」で第八回日本民具学会研究奨励賞受賞）／『日本民俗誌集成　第一一巻　新潟県・富山県』三一書房一九九六／『博物館と民俗世界』雄山閣一九九八など

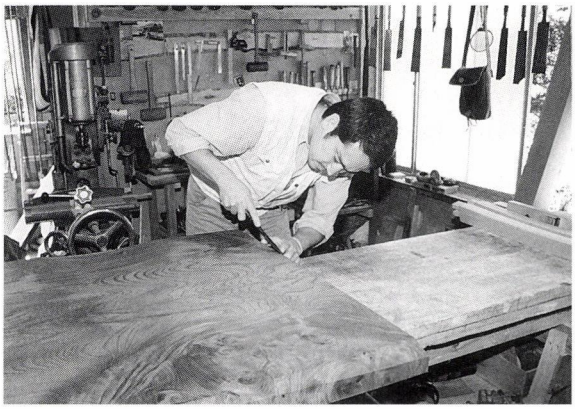


平成 14 年 5 月 8 日、米山薬師別当・米山寺密蔵院佐藤義隆住職を導師に、同寺薬師堂において大護摩法要が復活し、当日は十名余の修験者による読経と護摩が焚かれた。今後は毎年 5 月 8 日に厳修されるという。

こんな人

Russll CRAFT

ラッセル・ジョケラさん



作業中のラッセルさんと
右は製作された神棚の鞘



■プロフィール

Russell Hiroshi Jokela

1963年(昭38)アメリカ生まれ

1985～1995

シアトルで住宅建築・キャビネット・家具の製作・美術館の内装などに数多く携わる。

1997～2000

福岡市にて、オーダーメイド家具のデザイン・製作、レストランやバーの内装を手がける。

2000～現在

現在地で工房を構え、インテリア、家具の製作・デザインに取り組む。

ウッドワークの間伐材利用家具の製作にも参加。

ＮＰＯ法人「木と遊ぶ研究所」メンバー。

工房

上越市石橋1－5－6

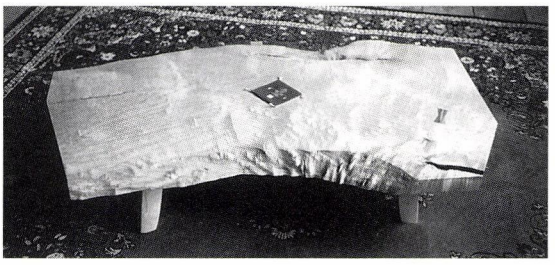
TEL／FAX 0255(43)4802

1997年、シアトルで仕事をしていた彼は、彼自身の言葉を借りるならば「アメリカに飽き」、日ごろ日本文化や寺院建築に興味を持っていたので、母のふるさと福岡を訪れて親戚の温かい心に触れ、そのまま福岡で仕事をはじめた。2000年、縁あって上越市の(協)ウッドワークの間伐材利用家具の製作に携わり、そのまま石橋に工房を開いたのが、ラッセル・ジョケラさんである。

彼の家具はすべて注文生産である。注文主の家を訪ね、作品の使い方、置く場所、ものの考え方などを聞きながら、頭の中でデザインを膨らませていくという手間のかかる作業を積み上げる。そして、素材の木の性質や美しさを大切にしながら一点一点作り上げていく。

彼は「木のある暮らし宣言」で、自然の美しさが純粋でまっすぐであるように、デザインも簡素さと機能を持っていなければならないと言っている。実際に彼の作品は、シンプルで且つ機能的である。

今年、建築家で照明器具のデザイナーでもある関由有子（上越市）さんと二人展を開いて好評を博した。





特集

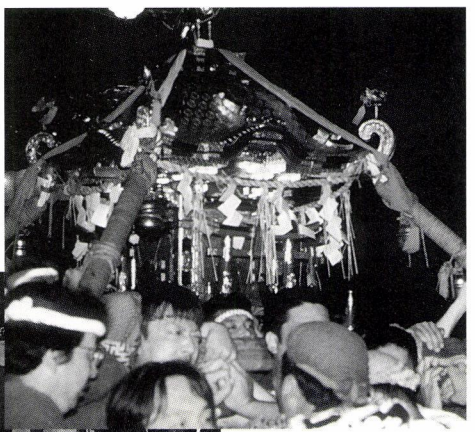
報道のなかの祇園祭

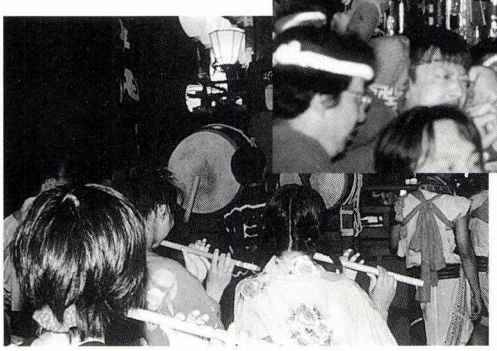
■昭和三十年まで

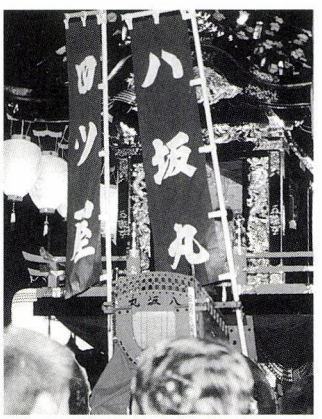
直江津祇園祭の景況。「大人より小兒に至る迄狂奔の姿なり」

大正四年七月十五日付「高田日報」











明治四十四年度
神輿巡幸順

神輿渡御の順路拾五日は本砂山、坂井、新坂井、新本砂山、新横、名古新地、塩谷新田、十軒町、横町、船見、新町、中嶋、中町、十六日片原、川端、諏訪新川端、新橋、寄區、川原、四ツ谷（屋）、曙、安國寺、砂山の各區にして午前八時出午后五時還御の筈なりと

直江津の八坂神社は「今町祇園社」または「八王子神社」（はっちょうじ）と呼ばれていたものが、明治の神仏分離で本家の京都「祇園社」（祇園感神院）が八坂神社と改名したため、それに習ったもので、祭神は素戔嗚尊（須佐之男）と八人の王子である。素戔嗚尊は神仏習合の世界では仏教の聖地、祇園精舎の守護神「牛頭天王」とされ、一方、斉明天皇の時（六五六）、新羅の牛頭山に祭られている素戔嗚尊を遷座して祭ったのが祇園社の始まりともいわれている（祇園の神輿を「天王さん」と呼ぶのは、この牛頭天王に由来している）。また「蘇民将来」の説話も付け加わった、インド・中国・韓国、それに日本古来の神が習合した国際的な神様といえる。（八俣大蛇を討つ素戔嗚尊は新羅から土舟に乗って出雲に渡っている）

直江津の祇園社はいつ勧請されたのであろうか？　越後守護代長尾能景が祇園社に宛てた明応四年（一四九五）の文書によって、それ以前からあったことが想像できるもののそれ以上の史料が無く、祇園会が盛んになった平安中期頃に勧請されたのではないかといわれている。

高田城下で出張祇園が行われるようになったのは、松平忠輝の高田移城によって直江津が衰微するのを恐れた神官が、百石の朱印地を辞退し、代わりに高田まで出向いて祇園会を執行することになった、というのが一般的であるが、なぜそのような言い伝えが生まれたのであろうか。

元和四年（一六一八）に藩からの「恒例により玄米五石を寄進するので懇ろに国家安全を祈るように」という書状が出ている。この五年前の慶長一九年（一六一四）に高田城が築かれ、その二年後に忠輝は改易されており、「恒例によって」と言ってるのは、替わった酒井忠勝家であるが、忠輝のころから寄進が行われていたと想像することができる。

しかし、城下へ神輿が出向いていたかどうかは、ずっと下った安永二年（一七七三）六月一七日、雨天で神輿が環御できず山王社（日枝神社）へ移したという記録まで待たなければならない。

一方、上杉景勝の会津移封によって廃絶同然だった祇園社を日吉神社（さんのんさん）の神官岩片氏が再興したと伝えられ、『頸城郡誌稿』には祇園会を福島城下でも執行したとあるので、堀氏の力添えで祇園社を再興し、福島城下に出向いたのが恒例となって、高田移城後も城下に出張するようになったと考えられないだろうか。

神官は、旅する神としての素戔嗚尊をうまく利用して「出張興行」を企画した名イベントプランナーではなかったかとも思えるのだが……。

祇

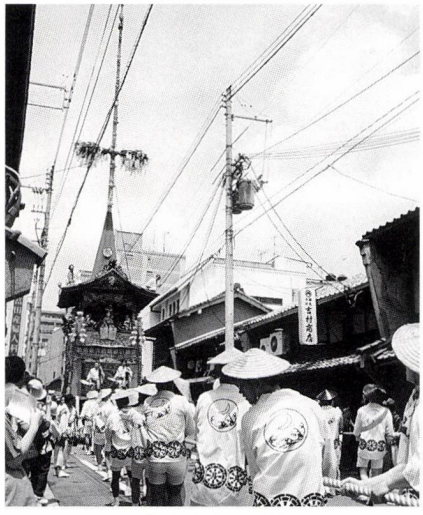
園会（以下祇園）は七月六日、高田からのお迎えによって神輿は車に乗せられて今町道を沿道の礼拝を受けながら陀羅尼八幡のお旅所に到着（古くはお馬出しのお旅所に入ったという）。翌七日は表通りの町内を巡幸する表祇園で、夕方お馬出しのお旅所に入り一四日まで滞在、この間の夜を宵宮といい大変な賑わいだったという。

一四日は職人町を巡幸する裏祇園。そして夕方、稲田橋畔で稲田の人たちによって船に乗せられ神輿は直江津へ環御。

この間の祭典費用は、明治まで全て高田の町の負担であった。

祭りの期間中は、各町内から飾鉾や飾旗が





本家京都の祇園祭

出て、豊年や景気の良い年には山車や屋台が出され、安永三年（一七七四）[*6]、殿様が屋台をご覧になったという記録もある。

城下最大の祭りの飾鉾も慶応年間に途絶えたといわれ、三十一町内の出し物の名称は残っているものの、どのような形であったのか、唯一残る関町の「くじゃく」の飾りから想像するほかないのは残念である。[*7]

直江津での賑わいが見えてくるのは、文化元年（一八〇四）が豊作・豊漁だったので、紙細工で屋形を作り、迎え舟に乗せて神輿迎えに出たという真行寺「智亮日記」の記録からである。

明治になると連日のように、新聞で報道されるようになり、明治四四年には、稲田からの川下りを鶴見大尉と共に「この希有の行事」をレルヒ少佐が見物したと報じ、「金屏赫奕（かくえき）たり」という見出しで、

市内小学校は勿論各戸業を休みて戸々国旗琉燈を掲げ、店頭は小奇麗に飾り立て眩ゆき金銀の屏風を立廻し、赤の御飯に一日の歓を尽くせり……

と、直江津の賑わいを書きたてている。

以下、記事を拾い読みすると、高田に比較して年々直江津の祇園が賑やかになり、趣向が凝らされていく様子がわかる。

大正二年の、大小五艘の奉迎船は八坂丸を象（かたど）り満艦飾を施して荒川河上に浮べ笛や太鼓で神輿を迎え、八坂丸に因める子供連の万灯も数区より出され、囃しや掛け声も面白く町内を練り歩く、という賑わいにもかかわらず、大正四年の新聞には「数年来、大喪その他のために極めて質素」にしていたが、今年は青年会主催の煙火が盛んに打ち上げられ、迎え舟・見物舟で河口充満し「壮絶快絶の美観」を呈するだろうといっている。また二四区中二一区が引船屋台を造り（二台も出す町内があって二四台になった）、浴衣姿の若衆は笛太鼓で拍子を取り、少年は火消し姿、少女は花笠の扮装で綱を引き、紅提灯の数は大空の星よりも繁く……。別の少年は小曳舟を担ぎ、芸妓連も屋台を出し、と派手に書いている。屋台製作費が全町内で四千円かかった。

大正五年七月一五日、直江津駅下車一〇二二（二等三〇人、三等九九二人）人中六百余人は高田からの見物客で、平日の二倍の乗降客があった。

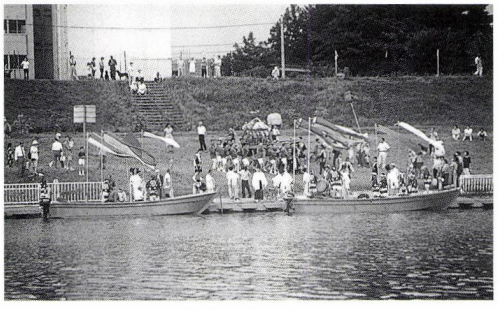
この年あたりから明治時代に見られた神輿巡幸の様子や時間割などが消えて、神事というより出し物の記事が増え、祭り見物の観客が現れて観光化していく様子がわかる。

この年、屋台の御饌米を午後七時半頃から八坂神社へ奉納するという記事が見られる。

面白いのは、毎年のように「雨に降られ」という記事と、神輿を稲田で一泊させるようにと、稲田の人たちが申し込んでいることである。これが聞き入れられず、稲田からの到着が午前二時や三時だったと見出しで報じている。







＊写真上　旧関町の飾鉾（上越市立博物館蔵）

祇園と魚價

七日は本町筋の本祭りなので裏町筋や在方から呼ばれて来る客が澤山あるので自然魚類等も値が張る時だ。

田端の間嶋魚問屋を訪ふて魚の相場を聞くと近頃北海が荒れて居るので一向に漁がなく毎日僅か計りづゝ入荷する丈けで重なるものは佐渡鯛に新潟廻りの佐渡鮪に小鯛位のもので今年は例年の今時期と比べると非常に減っているとのこと相場は大底次の如くであると。△鯛近海産一貫目一圓十錢内外、佐渡産一貫目九十錢から一圓位△小鯛大一尾十四五錢中一尾九錢から十錢位△鮪一貫目一圓卅錢から一圓六十錢位迄△烏賊本年は稀に少なく大一疋五錢小一疋二錢5厘位△フクラゲ一尾十五錢から廿錢位迄△飛魚一尾二錢内外△鰆非常に少なく一尾五六錢其他北越出雲崎附近に於て漁れる鮫丸掛一貫目三四十錢四濱のもの一貫目五十錢位なりと。

（大正四年七月九日付「高田日報」より）

昭和九年、この年の北陸地方は連日の豪雨で「前例のない陸送」の還御となり、また県内初の防空演習が一四日から一六日まで行われたため、屋台の町内巡行も中止になった。一四年は日中戦争二周年にあたり「事変記念日（七月七日）から高田祇園蓋あけ」と戦時下の自粛ムードが強くなってくる。

一五年、増水で神輿の川下り中止。

一六年、戦時下につき中止。

一七年、市内の有力者が、川下りが中止になると祭りの意義が失われるので、来年は復活するように望む、と談話を出している。

戦時統制で「高田新聞」「高田日報」が「新潟日報」に統合された一八年、高田の祇園では、通りにルーズベルト・チャーチルの似顔絵に突撃する刺突台が設けられ、戦時下の祭典にふさわしいものであったという記事を最後に祇園の報道が消えた。

二二年七月一五日付「新潟日報」（上越版）は、祇園祭（この年から「ぎおん」または「ギオン」という表記になっている）は、高田と直江津が同じミコシを練り廻す祭りで、八坂さまが高田に出稼ぎして、しこたま上がったお賽銭を持って引き上げ、その晩から凱旋祝いのような喜びに全町内沸きあがる祭りだと、とんでもない（？）一文を載せ、一四日夜は、川下りの昔を偲び灯篭流しがあり、翌日は各町内が競って屋台を出し、同時に行われる商工祭りには素人演芸の花自動車、信越・ステンレス・日曹の懸賞金付仮装行列が町内を練り歩くと報じている。

二五年になると、真夜中にミコシ船をフンドシ一つの若人五〇人余が川中に飛び込みミコシを陸あげすれば、全町万灯を飾り不夜城が出現とあるので、この年から現ＪＲの荒川鉄橋のあたりからの直江津だけの川下りが始まったようである。

二六年、観光協会の底抜け屋台の登場、ぎおん・佐渡周遊観光の募集。二八年には信州から貸し切りバスで見物客がくり込んでいる。

二九年七月一三日、市制施行祝賀提灯行列が行われ、祇園祭とあわせてミス直江津を三人選出。一四日夜には、ナイヤガラ大瀑布や水中スターマインで三万人の人出。翌三〇年は、会議所で製作中という雪洞の寸法（尺）が、なぜか事細かに書かれている。この年は、全日本軟式卓球選手権大会が開催され、川下りの光景が選手団の目を奪い、七万人の人出で大賑わいであった。この日、三本の臨時列車が出されている。





☆昭和四五年から二四日に、川下り用の軽量の神輿による川下りが復活。昭和五一年から現在の日程になり、平成三年稲田からの川下りが復活した。

＊1・2『日本書紀』／＊3・4・8『直江津町史』（白銀賢瑞著）／＊5・6『記録便覧』（『高田藩制史研究』中村辛一編）／＊7『高田市史』（布施秀治著）

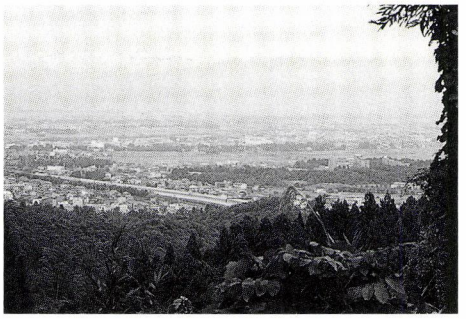
直江津祇園祭　http://www7.plala.or.jp/NAOETU-GIONSAI/

で遊ぼう

迷が楽しめるゾ！



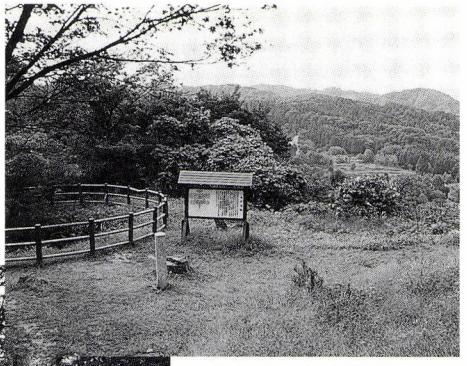
天守台



柿崎和泉守屋敷から上教大方面を見る



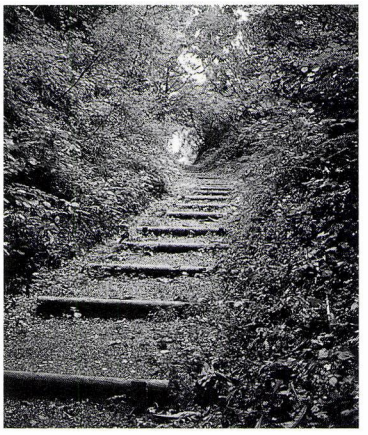
鐘楼台直下から大井戸への道



大井戸と牛池方面を見る

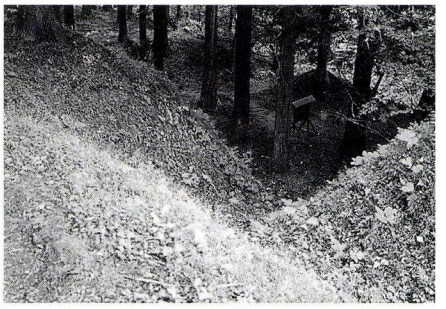


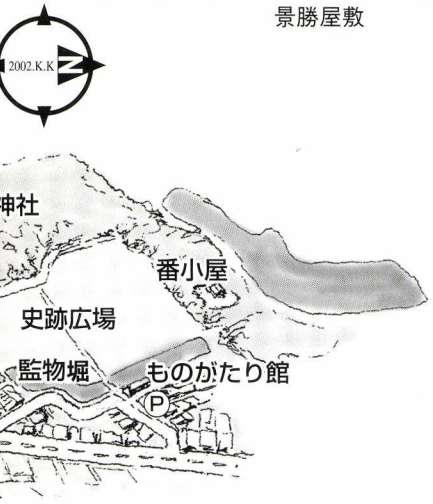
景勝屋敷



大手道　南三の丸直下

直江屋敷から千貫門方面を見る





春日山はいうまでもなく、わが上杉謙信公の城跡ですが、植物観察・バードウォッチングなど自然に触れながらちょっと汗を流して歩くには最適な場所です。もちろん、春日山は中世の山城の姿をたいへんよくとどめており、年々その史跡整備が充実して、道標や屋敷跡などの説明板があちこちに立てられて、城跡の探訪にも安心して歩くことができるようになっています。また、所々にガイドマップが入ったポストが置かれていますので、それを見ながら歩くことができます。

コースは、近年復元された「大手道」を登るコースがあります。この道は春日山城の中でも最も古い景観を見ることができ、南三の丸・柿崎和泉守屋敷から本丸へと歩きます。

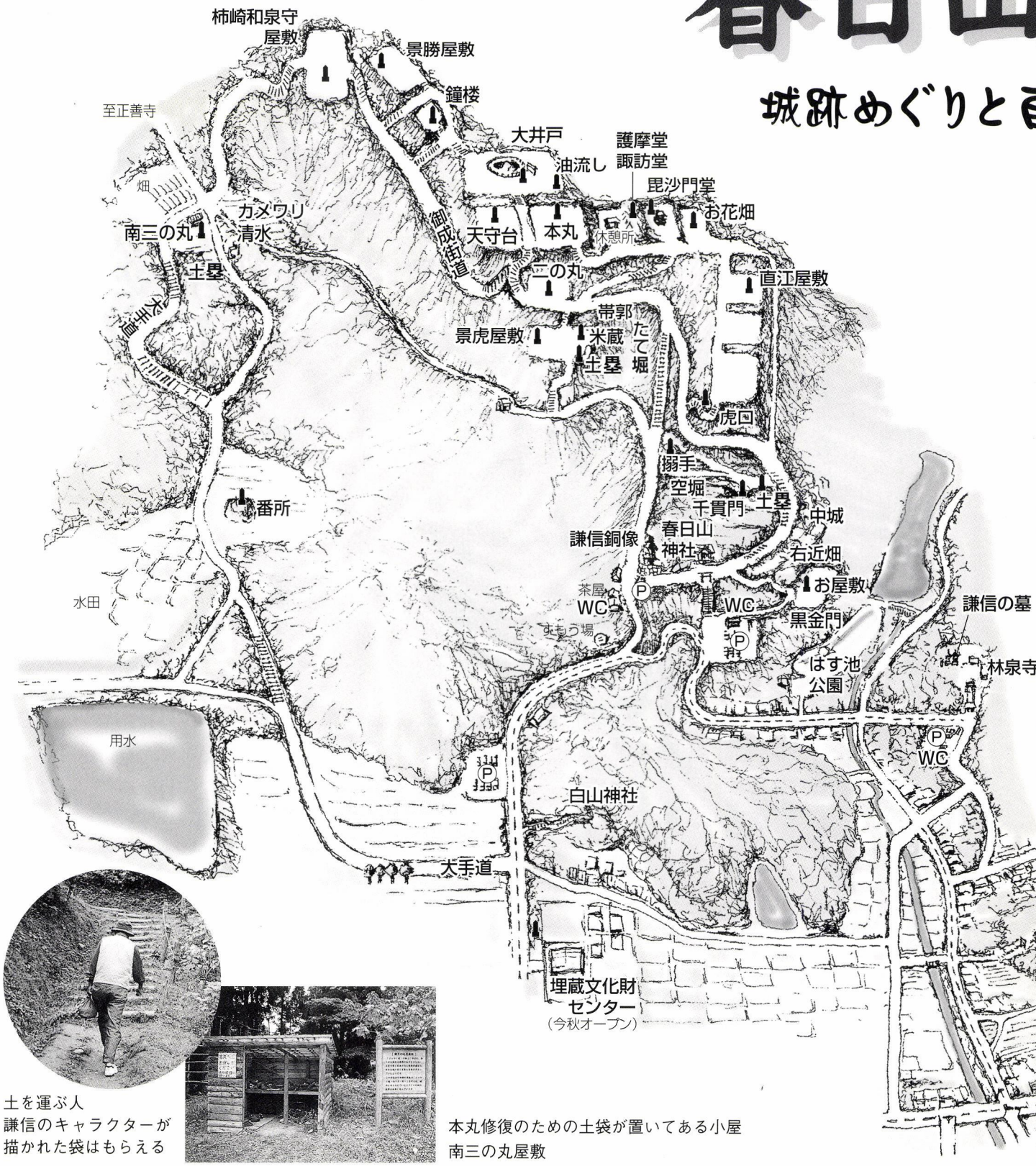
もう一つは、春日山神社の右手から千貫門・直江屋敷・毘沙門堂・本丸へと登ります。直江屋敷は鋭角の土塁や屋敷跡が非常によく残されています。帰りは二の丸・景虎屋敷を歩きましょう。

気付いた方も多いと思いますが、山麓線や謙信公大通りから春日山を仰ぐと、毘沙門堂や本丸周辺の構造がよくわかるようになりました。これは城跡保全のために杉を伐採しているためで、この杉は今秋オープン予定の埋蔵文化財センターの収蔵庫の棚などに利用されています。

ミニ特集

春日山

城跡めぐりと



土を運ぶ人
謙信のキャラクターが
描かれた袋はもらえる

本丸修復のための土袋が置いてある小屋
南三の丸屋敷

フリースペース

山を楽しもう

――中高年向け安全登山のすすめ――

永島賢司　えいじまけんじ

世の喧噪の中、季節の移ろいは早く、気付けばはや六月、衣更えや山開きの季節であります。近年、高齢化社会の進展と共に余暇時間の活用、健康維持、趣味の追求などの目的から中高年の登山者が急増中であります。

先月も世界最高峰エベレスト（八八五〇M）に日本の登山家が男女別々のチームで登頂に成功、お二人共登頂者としては世界記録の高年齢（♂六五歳・♀五八歳）で先ずは〝めでたしめでたし〟であります。

先年わが山仲間一二名（平均年齢六三歳）がロシアの未踏峰トルバチェク峰に挑戦、全員頂上を極めて帰国、最高齢者は七八歳で若者に劣らぬパワーを発揮されたとか。私も昨秋、上高地から穂高涸沢に入り、中高年のグループ登山や七十代のカップル登山者に会い登山人口が高齢化していることを実感していました。

里山の山菜採りから本格的な登山まで山の愛好者として大いにお勧めですが、山に入る人が多くなればそれに比例して事故もまた増えマスコミを賑わします。山での事故は一歩間違えば悲劇に直面する場合もあり、私も多くの遭難事故、そして悲しき場面を見てきました。楽しいはずの山行が悲劇に変わらぬよう私の体験から少しでもお役に立てばと安全登山、山歩きの基本を簡単に列記しました。

小さな山行でもそれ相応の知識と体力が求められます。山ではどれ程事前に準備を万全に整えても予測出来ないことが必ず発生すると思うべきです。以前と比べ用具は進歩し交通の便は良くなりました。しかし山の危険は昔と何ら変わらないことを知るべきです。

1 計画　日程、行程は余裕をもって立てる。無理は絶対にしない。引き返す勇気も大切。

2 体力　日常の歩行訓練、体力づくり（トレーニング不足は足にケイレンを起し易い）。

3 装備

(1)ザック…タテ型で出来るだけ躰にフィットする物を選ぶ。荷づくり（パッキング）は最も重要な登山技術の一つである。衣類は絶対に水に濡らさない工夫が必要。

(2)着衣…綿の肌着は濡れると体温を奪う。吸湿性が良く、早く乾くアウトドア用化繊（ウイクロン・ダンクロン）が最適。日焼け、虫刺され防止のため長袖を。夏でもセータやウインドブレーカー、雨具（ポンチョ）等、着替えを多めに。

(3)靴…山行の内容にもよるが底の厚いトレッキングシューズか布製の軽登山靴が初心者向き。何よりも履きならしておくこと。

(4)食料…自然の中で食べることの楽しみも山登りの醍醐味の一つ。主食は一度に沢山食べるより間食を多くした方が胃に負担はかからない。予備食は少し多めに。非常食〝ピンチ食〟は蜂蜜、水飴、ウイスキー等、温めて流動食として飲めるもの。

(5)その他…救急薬品、ガイドブック、地図、コンパス、ラジオ、呼笛、百円ライター、電池、カメラ、水筒、携帯電話、ゴミ袋等々……。

4 基本知識　国体に登山競技のあることをご存知の方は少ないと思いますが、この競技では予戦・本戦を通じ筆記テストが行われ、気象（天気図の作成・観天望気）、天文（方位確認）、読図力（地形概念・ルート断面図の作成）、山の動植物、日射病と高山病の違いと手当の仕方等々の問題が出され、五日程の入山中、登山技術、生活技術、チームワーク等全般が採点の対象とされます。





上　剣沢　昭和30年代　筆者
下　新潟国体（昭39）のための春山合宿　中央筆者

一般の方も入山前にコースの難易度や天候、距離、所要時間等事前に調査をしておきたいものです。

5 チームワークとマナー　登山は自然が相手ですが登るのは人間です。団体登山は体力の弱い人を先に出しペースを合せ、お互いに扶けあいながら急がずゆっくりと。山を汚したり高山植物は絶対に採らない。登り優先、出会う人には〝こんにちは〟の一声を！

いよいよ本格的な夏山シーズンを迎えます。また美味なる薮竹も段々と山深き所へ移動します。高齢化と共に体力、バランス感覚が低下し転倒、滑落等のアクシデントを起し易くなります。「山は楽しく、安全第一」です。生涯スポーツとして、またいろいろなジャンルで山を楽しんでください。

今年は国連で決められた国際山岳年の年に当たります。山に関心ある人ない人、皆で一度山のことを考えようと言うグローバルな催しです。大は地球規模の森林保全と開発の問題、小は山のゴミ問題、富士山や尾瀬のトイレの話まで。わが国は山国であることを自認しておりますが、研究者も行政もまた市民レベルでも山を中心とした自然環境の問題を真剣に考行動する山岳年であってほしいと思います。

ふる里の山に向かいて言うことなし
ふる里の山はありがたき哉

有名な啄木の歌です。わがふる里の山々は朝な夕なに妙高・火打・焼の頸城連峰を仰ぎ見て、また関田山脈から菱ヶ岳・米山まで、美しい自然のままの姿で後世へ引継いでいきたいものです。

七月は火打高谷池、天狗の庭、黒沢ヒュッテ周辺はハクサンコザクラをはじめ色とりどりの山の花で一杯になるでしょう。

この原稿を書きながらも山への想いがつのります。そして私の好きな深田久弥の山の詩が、また山恋を誘ってくれます。

山の茜を顧みて
　一つの山を終りけり
何の俘のわが心
　早くも急がれる次の山

■プロフィール
日本山岳会・直江津山岳会会員
元全国山岳連盟公認指導員

雪国の固有とよばれる植物

長谷川康夫　はせがわやすお

二年前、上越地方のイタドリの調査に、英国レイチェスター大学のジョン・P・ベイレイ博士を案内したことがある。聞けば、日本から侵入したイタドリと英国のイタドリとの間に雑種ができてしまって、純粋なイタドリが少なくなってきているので、純系を守るための細胞学的研究をするのだという。これと同じ現象が、わが国でもエゾタンポポと帰化したセイヨウタンポポとの間にも起こっている。両種の間で交雑がおこなわれ、外部形態はエゾタンポポであっても、遺伝子レベルでみると、その九〇%あまりはセイヨウタンポポであるという報告がある。

そのとき、彼は日本はすばらしい、一歩踏み出せばもう植物の種類が違うといったことばが記憶に新しい。わが国は、多様な植物が自生する国の一つであり、種類も多いが、真に固有のものとなると、やや少ないことに気づく。それは、大陸から離れたり、陸続きになったりしたことに起因しているらしい。

日本海側の代表的な固有種といえば、富山県の魚津市から糸魚川―静岡構造線を越えて、西頸城山塊の海岸線に沿った狭いフォッサマグナ（北部フォッサマグナ）地域に生じるクビキカンアオイ（別名・クロヒメカンアオイ）と山形県の鶴岡市や福島県まで追跡することができるコシノカンアオイがあげられる。故前川文夫博士は（私信による）、ヒメカンアオイからクビキカンアオイ、そしてコシノカンアオイへと変性したとしている。前者の染色体数は、体細胞で二四本、後者のそれは四八本で倍数になっている。しかも、頸城平野の西縁にはクビキカンアオイ、東縁にはコシノカンアオイがあって、その先の東にはカンアオイ類は分布しない。いいかえれば、コシノカンアオイは、西方から変性しながら東進してきたカンアオイ類の最先端にあるということになる。しかも、両種は、地層の新旧によって棲み分けをおこなって、決して混生することはない。これと似た現象は、太平洋側の南部フォッサマグナでも起こっていて、本州の西方地域（関西地方）に広く分布するヒメカンアオイから変性したと考えられるオトメアオイがある。フォッサマグナの南端と北端で似たような現象が起きていることは、地史的観点から植物の分布調査を進めてきた者にとっては、誠に興味深い。

それをまとめれば、次のようになる。

南部フォッサマグナ（太平洋側）
　ヒメカンアオイ → オトメアオイ
北部フォッサマグナ（日本海側）
　ヒメカンアオイ → クビキカンアオイ → コシノカンアオイ

また、深い雪に適応した固有の種として、チャボガヤ、ハイイヌガヤ、ヒメモチ、ハイイヌツゲ、エゾユズリハ、ツルシキミの低木がある。これに対して太平洋側の無雪地帯では、いずれも高木になるイヌガヤ、モチノキ、イヌツゲ、ユズリハ、ミヤマシキミ（亜高木）がある。太平洋側は、高木であるのに対して、日本海側のそれは低木であることは、面白い現象である。

それにはいささか訳がある様に考えられる。とかく深い雪というと、一般に寒冷で過酷な自然と決めつけ、植物にとっては厳しい生育環境が存在すると考えがちであるが、それは誤りであって、北西の季節風が吹きすさぶ関東の空っ風の条件下よりも、雪の下は放射冷却が少なく、真冬でも比較的安定した温度と湿度が保たれていて、0℃以下になることは



クビキカンアオイ（別名クロヒメカンアオイ）



コシノカンアオイ

ない。そこには、雪に被われることによって大きな温度変化や乾燥から免れるといったマイルドな環境が出現することになる。低木のユキツバキにみられるように、倒伏して雪に埋もれ厳しい冬をやり過ごす。冬期間雪の重みに逆らうことがなく、しなやかに倒伏して、雪解けとともに再び立ち上がるということは、雪国の植物が身につけた知恵としか思えない。そのためには、雪に逆らって立つ高木よりも、低木であるほうが雪害から免れることになる。

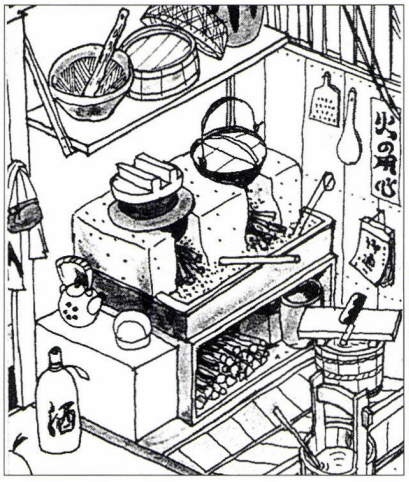
その他にも、太平洋側と対比される固有の種がある。トキワイカリソウやスミレサイシン、オオバキスミレ、ユキグニミツバツツジ、ネマガリダケ（チシマザサ）などがそれであるが、これに対して太平洋側ではイカリソウ、ナガバノスミレサイシン、イチゲキスミレ、トウゴクミツバツツジ、アズマネザサなどがある。

また、上越地方には、遠く第三紀の地質時代から現在まで生存している古固有種とよばれるわが国にしか生育しないメギ科トガクシソウ属のトガクシソウや、1科1属1種のシラネアオイ科シラネアオイ属のシラネアオイなどもみられるが、これらの植物については、いつか機会があったら筆を執ることにする。

（参考文献省略）

■プロフィール
研究分野／植物分類・地理学、珪藻学

海西 東陸



「江戸の町(下)」(草思社)より

落語に「へっつい幽霊」というのがある。筋書きを説明する前に「へっつい」とは何ぞやということで、「へっつい」も死語に等しくなってしまった。噺家さんもご苦労なことだと思う。

さて「へっつい」とは、読者ご存知のとおり、「かまど」のことである。それが何故に「へっつい」なのか？　また京大阪では「くど」、敬称つきで「おくどさん」というようだ。

その語源はといえば、『広辞苑』に向かって「したり顔」で、というのも変だが、「竈」という括りで全部きれいに説明してくれている。

筆者の祖母は、京大阪の人ではないが、「くど」と言っていたし、「へっつい」とも言っていたが、「かまど」とは言わなかったような気がする。彼女はどこの生まれなのだろうか？

京大阪と断ったのは、奈良県のあるところで、私どもは「かまど」と言いますと答えてくれた。「万葉集」の国見の歌の「民のかまど」の地であれば、もっともなことかと思った。ついでに滋賀県のあるところでは「くど」と言っている。

市内の古い町屋の台所が「庭」と称する土間にあるのは、関西の形式であるといわれ、榊原藩時代にできたという説もあるが、たまに江戸風の板の間に台所がある家も見かけた。

先の祖母は「唐津やと言うのは、瀬戸物やのことを言うのだ」と教えてくれた。唐津も瀬戸も焼物の産地である。唐津物を瀬戸物と言うのも妙だが、納得して不自然ではなかった。

江戸では、着物職人は男性の仕事であったため、あぐらをかいて仕事をするので、衽台は足の指であった。あっても奥さんの家庭用であり、一方、関西では男でも衽台を使うという。やはり、祖母は衽台を使っていた。読者のお宅ではいかがか？

家の間取りの寸法に、本間（京間）と江戸間というのがある。わが地に多少の混在が見られるという。

このようなことをどんどん挙げていけば、いわゆる「鮭鰤文化」に行き着いてしまう。

しかし、よくよく考えてみれば、文化が先にあったわけではない。それらは流通の上に生まれた差異であろうし、職人の技の流れた方向も考えられる。

結果として文化が生まれるのだろうと思う。いわば、経済が文化を生むと言っても過言ではない。

とは言うものの、それでは「そば」と「うどん」の分水嶺はどこなんだということや、関西では「トコロテン」に黒蜜をかけて食べているのはどういうことか。（不味くはないだろうが）葛きりではあるまいし、何を考えているんだ、と言いたくなる。彼（女）等は「トコロテンハ、カラシ酢醤油デ食ベルモンダ」と聞くと、「ご飯みたいで」気持ちが悪いと言う。（ちなみに、トコロテンを正しく一本箸で食べる地域はどこまで存在するのだろうか）

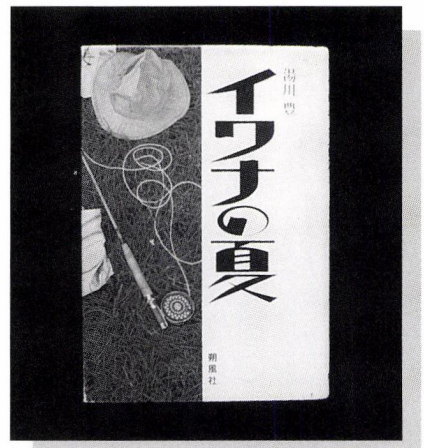
こんな一見ばかばしいようなことを逐一調べ上げていくと学問になり、本稿のテーマである「東西」あるいは「海と陸」ということを考える材料にならないかと、いつも考えている。

それにしても、米朝さんのネタ帖に「おくどさん幽霊」というのがあるのだろうか……。

おあとがよろしいようで。

（滋）

■読書びと



イワナの夏

湯川 豊著

朔風社刊
（現在は筑摩文庫）

一九七三年に連載が開始された漫画『釣りキチ三平』。町の中心から二十キロも離れた奥羽山脈の山襞の寒村で育った作者矢口高雄の、原風景に裏打ちされた印象深いコミックであった。（昨秋今春と十八年ぶりに書き下し再開された）

矢口には、『ボクの学校は山と川』（白水社・一九八七年）という自伝的エッセイがあり、敗戦後の日本がまだ保っていた、貧しさを補って余りある人と自然との関わり、そして心のありようを、本誌抄録の〝百歳バチャ〟同様に思い出させてくれる伸びやかな回想記である。

そして私には異空間だった釣りキチ達の抒情の世界を、まさに〈目からウロコ〉で発見させた『イワナの夏』も同じ年に上梓された。

湯川豊（ゆかわゆたか）は、一九三八年新潟市に生まれ、慶應大学仏文科を卒業、六四年に文藝春秋社に入社、各雑誌編輯部を経て文学界編輯長となり多くの新人を発掘する。その後は出版局文芸部長をつとめた。現代文学の第一線の現場に立ち続けた湯川が、オフ期の楽しみに渓流釣りの専門誌に寄せた文を中心に纏め、初めての著作として私達に手渡したのがこの珠玉の一冊である。

収められた十一のエッセイは微妙な陰影に光る渓流の小石のように、さまざまなテーマで綴られるが、書名と同じ巻頭の一編で『乱舞』と小題された情景に著者の想いは語り尽くされる。

圧倒的なカゲロウの羽化（ハッチ）に誘われて出現したイワナの大群を見つめながら〈イワナが不思議な存在ではないのだ……最も確実なものとしてそこにあり、深くそして鮮やかな命をいとなみつづけているにちがいない。私は、私と同様に不安定に揺れる一本の竿によって、単純で力強い生命に時として接することができるだけなのだ〉と看破する。そして、一緒に釣る仲良しの兄の頭上に踊る〈白い帽子〉に少年時代の幸せだった夏の記憶を蘇らせるのだ。

奇譚集の趣もある。渓流魚に没入して朽ち果てたいという欲求のおもむくまま、職と女房から放り出され幻の名竿を手に乞食になった男との交流に、少年のとき白山神社のドンド焼きの宵に出合った父娘乞食の眼差しを重ねる『渓流乞食』のペーソス。六十センチの大イワナが棲む大渕に降りるため、ダムの業務用エレベーターに潜り込み、漆黒の闇の中挑戦した秘密の釣り、そして岩の割れ目に挟まってもがく未見の大魚の強い手ごたえを語る『夜のイワナ』の夢幻感。山でめぐり会った少女を描いても、湯川の筆致は夏の陽炎に溶け込んでしまうようだ。

湯川の生き方の質を問うものに『緑の中へ』と名付けられた植村直己追悼文がある。湯川は若き植村と出会い終生冒険行のよき相談相手であった。『植村直己と山で一泊』（小学館）というロングインタヴューの聞き役もしている。

マッキンレーで行方不明の植村に青山斎場で別れを告げた湯川は、発作的に北の渓を歩きたいと思う。ブナ林の中を釣り上がりヤマメを追いながら、そして早池峰の山で緑とハルゼミの声につつまれながら湯川が流す泪は、仕事とあそびに常に誠実に向き合ってきた二人の男の勁き友情と倫理の証である。

その後、池澤夏樹がカムチャッカで熊に襲われて不慮の死を遂げた写真家星野道夫の生涯と仕事の〈幸福感〉を問い続けたように。

我が野呂邦暢に〈閑暇のたのしさ〉を語って、「くつろぐことと、のんびりすることとは、おのずから異なる。くつろぎは生活に対して果敢に挑むことのできる人のみがはじめて手に入れる報酬である。……生活には抒情がある。抒情とは人生の歓びである。」という一節がある。

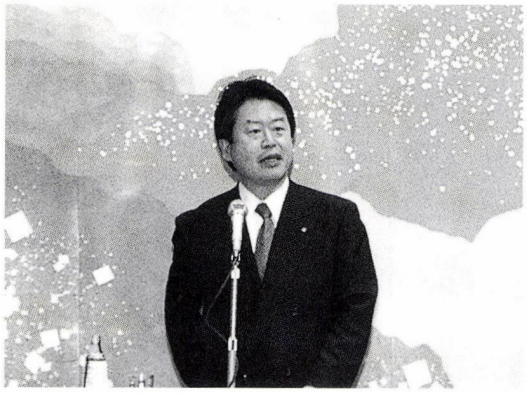
直江津にひろがる海と頸城の山々に夏の恵みの日々が巡りきたるとき、緑陰一冊の爽やぐ本となることを請け合っておく。

（箴）

●なおえつ信金倶楽部講演会〈抄録〉

信頼回復なくして景気回復なし

講師・割田　満



わりた　みつる
八十二銀行常務取締役　東京営業部長

＊本稿は平成14年3月19日に行われた、なおえつ信金倶楽部総会での講演の抄録である。

八十二銀行の東京で仕事をしております割田でございます。

六三年の二月から平成元年の四月まで直江津支店で、初めて支店長ということで仕事をさせていただきました。在任して一年四ヶ月ほど経ったときに本部へ呼ばれまして、海を渡れと言われたんです。佐渡へ出張所を作るんかなと正直思いました。「日本海を渡るんですか」って言ったら、「いや、太平洋を渡れ」と言うことで平成元年、三代目のニューヨーク支店長ということになってしまったわけです。

＊

現在、東京をベースに動いているわけなんですが、今マーケットでどんなことが言われているかということを、私なりに感じていることをご報告申し上げたいと思います。

今日のタイトルは「信頼回復なくして景気回復なし」ということで、これは心底思っております。当然ながら構造改革なくして景気回復なしだとか、不良債権処理なくして景気回復なしという、その類推であるということはお分かりだろうと思います。鶏が先か卵が先かという議論自体必ずしも意味がないとは言いませんが、お客様の銀行に対する信頼が無くなってしまった、食品の不当表示問題で家庭も何を信じていいか分からない、政治の世界も何とか問題というのが相次いでおりますが、その一番根底にある信頼の喪失、不信が溢れ返っているような状況では、本当の回復というのはあり得ない。また海外の見る目も大変厳しい状況になってきております。

また、向こうのアナリスト等と話していると、この二十一世紀の考え方として、東洋の哲理あるいは日本人的な考え方でないと、本当の意味での環境問題だとか平和ということは訪れないんじゃないか、むしろ東洋人あるいは儒学的な考え方をきちっと、我々自身がもう一度見つめ直していくことで次の展望が開けるんじゃないかなということも実感しております。

＊

最初に一体「信頼」とはどういうふうに考えたらいいのか、まさに常識用語ですから、普段私ども意識して使っておりません。しかし、これだけ不信が増幅し蔓延している時代であればこそ、信頼ということを真正面から一度捉え直しておくことが必要だと思います。

木村剛さんは、金融問題の第一人者として、もともとは日本銀行にお勤めの方でまだ四十前でしょうか。アメリカ系のコンサルの日本代表をやっておられ、大変厳しく政策当局あるいは銀行に対して物申しております。特に金融面からの発言ですが、現在の問題の根源は「政府金融当局に対する信頼感の欠如」である。誰が信頼を欠いてるのかというと「マーケットが信じていません」ということを訴えているわけです。一方当局はどうしているかというと、トコロテンみたいなもので、金融界に対して「お前らがしっかりしないから当局が責められるんだ」と下へ下へという変な構造になっておりまして、人間の悲しい性でどうしても他人に転嫁していってしまう。

作家の村上龍さんは、去年の九月一一日の例のテロを総括するコメントや本を出されておりますが、その中で「閉塞感がいま蔓延し

ている」と、それは不信感によって生まれているんだということで、アメリカあるいは宗教対立というものの根っこにどうしても拭い去ることのできない不信感があるんで、これがすべての元凶になってきていると、文学者の立場から発言しています。

また、山岸俊男北海道大学教授が『信頼の構造』という本の中で、「信頼」を敢えて定義すればということで分析されております。さすが学者だなあと思うのは、四、五年前から、二十一世紀を睨んだキーワードは「信頼」になる。今「信頼」という言葉をきちっと定義しておくことが、今後の議論を正しく展開する上で必要だろうと言っています。たしかに、安心、信頼あるいは信用という言葉が、人によって定義が違っていますと、なかなか議論が深まらないうえに誤解が生じてしまいます。

集団主義社会、これは日本社会の一つの特徴でもあるわけで、家族はその典型例でしょうし、日本的な会社主義っていうのも集団主義社会かもしれません。あるいは身内主義、これは安心を生み出すけれども信頼を破壊する傾向が非常に強い、それでは安心と信頼とはどう違うか、一言でいえば、自分と相手との間に利害が発生するはずもないという予定調和を前提にしているということであろう、従って目的もおのずから一緒であるというような状況にある関係を安心というふうに定義できるということです。

それに対して信頼というのは、一般的な社会関係の中に発生するもので、きちっとした冷静な観察が前提となる。従って相手と自分の間に差異があって当然で、その差異を如何に克服するか、そのあかつきに出てくるものが信頼だということなんです。従って信頼していた相手に裏切られることもあるわけですが、安心というのはそれが崩壊・破壊された場合、そこで茫然自失してしまうわけです。ところが信頼の場合は、相手の非をいろいろいう前に自分の分析あるいは観察が不十分だったということで、もう一度自分自身を反省するというのが信頼であろうかと解釈できると思います。

安心というのは、それこそ人を信じきったといいますか、安心しきっていたのがある日突然ひっくり返されら、自分を責めるなんていう心境には当然なりませんし、最後はもう近親憎悪みたいなことになってしまうという……、その辺を取りあえずは押さえておきたいということです。

それでは、信頼というのはどういう状況の中で必要とされるかということですが、今こそ信頼が必要とされる時はないということに尽きるかと思います。ただ、社会的不確実性が大きい状況というのは信頼が生まれにくい、生まれにくいときにこそ信頼が必要とされるということですから、まさに大きなパラドックスなんです。世の中はだいたいそのパラドックスで出来てきておりますから、ここで一歩退いて直視することによってしか解決はないだろうと思います。

それをなかなか直視することができないものですから、他のところへ解決策を持っていってしまう。不良債権処理だとかいうことに行ってしまうんですが、それはやっぱり本質的な解決にはならないと思います。そういう大変不確実性が大きな中でどうすれば信頼が生まれるのか、一言で言えば知性が必要ということになるんだろうと思います。相手が信頼できるかどうかを見分ける感受性とスキルを身に付けた上で、とりあえず信頼できると考えるゆとりを持つ、そういう知性が必要になってくるわけです。それが生まれますと他者に対する信頼が生まれますから、社会の効率的な運営が出来るようになるということです。

＊

私は、人間というのは基本的に弱いということで、性弱説の立場に立って物事を考えていく必要があるんじゃないか、世の中では性善説、性悪説ということが強調されておるわけですが、ニューヨークで仕事する上で性善説に立ったらこれはもう、足元をすくわれるに決まっています。向こうの世界は、相手が悪いことをするという前提でいろんな制度が出来ているわけですが、これは、やっていて気持ちが暗くなるわけでして、もう一歩突っ込んで、人間自身弱いからどうしても悪の道に立至ってしまうという性弱説に立って相手と対していけば、相手のためにもなり自分のためにもなる、それを経て初めて信頼というのが生まれるんだろう、というようなことを日頃考えております。

アメリカでも日本でいう癒しみたいな、ヒーリングが盛んに言われていまして、善に対して益々関心が高くなってきているのは、決して我々の考えていることが日本的な特質性だけじゃなくて、むしろ共通する場面があるんじゃないかという気がしております。

以上のようなことが今日の話の底流として流れているわけですが、その信頼感の欠如がいろんな問題を呼び起こしてしまっているということで、今、なんとかぎりぎりに均衡を保っていると見ておくべきだろうと思います。

＊

いろんな意味で今ほどリーダーシップが問われている時代はないと思います。リーダーシップがある社長の率いている企業の株は高い、あるいは一国の首相だとかあるいは政治の世界でもいろんなことが言われております。何だかんだ言っても本当の意味でのリーダーシップがある人かどうかというのが分かってしまう時代になってきて、今までは神輿の上に乗っていてものを言う、リーダーシップがあるかないかという差はあまり出なかったわけですが、今はリーダーシップのあり方が結果として出てしまう。だからこれからリーダーになるのは大変な時代です。今日おそろいの皆様、企業の大小は別にしてそれぞれ組織の長の方ですから、その心労本当にお察しするしかないんですが、いろんなリーダー論が言われておりますなかで、ハーバード大学教授のゴフィーとジョーンズが言っている、パーフェクトリーダーというのはいません、期待もしていませんということを紹介しておきます。自らの欠点をむしろ表に出した方が部下あるいは社員もついてきますよと、それを変にカモフラージュしちゃう、冒頭に言いましたように人間弱いわけですから、弱さを庇うということは誰しも持っているのですが、その弱みをあまりにカモフラージュしちゃうと、ちょっとしたボタンのかけ違いがとんでもない、抜き差しならないところまで行ってしまうということなんです。



むしろリーダーの欠点を自分が補おうという心情が働く、いずれにしてもそのリーダー像というのはこれという正解がないわけですから、ご自身が置かれた環境の中で、一度その辺も考えてみる必要があるのかなということです。

＊

長野経済研究所の職員が、今、長野のスキー場が大変な状況なものですから何かヒントを得たいということで、スイス、フランス、イタリアのスキーリゾートを視察に行ったところ、長野の状況と比較して「長野の方がよほど恵まれている。環境的には東京があれだけ近いところにあるにもかかわらず不振なのは経営能力がないの一語に尽きる」と一刀両断に言われてしまった。哲学とか思想、あるいは戦略がないだけだということで、たしかに翻って社会を見てみると思想がなくなってしまっているなという危惧がある。最後はやっぱり考え方あるいは哲学の問題に帰するのかなということで、今思想界でどういう動きが出ているのかということを最後にお話しようと思います。

これは、はなはだ青臭いところなんですが、どうしても我々は進歩主義的な今日より明日、明日より明後日が良くなるという直線的な世界で育ってきて、そういう発想から抜け出せないわけですが、一方で仏教の世界というのは、私が言うまでもなく変換思想なんですね、順繰りに回る。完全な同心円じゃなくて少しずつは大きくなって行くんでしょうけれども、

これは生物のＤＮＡも二重螺旋と言われていますし、宇宙も螺旋でということで、どうも世の中っていうのは突き詰めていくと渦巻きかと……。

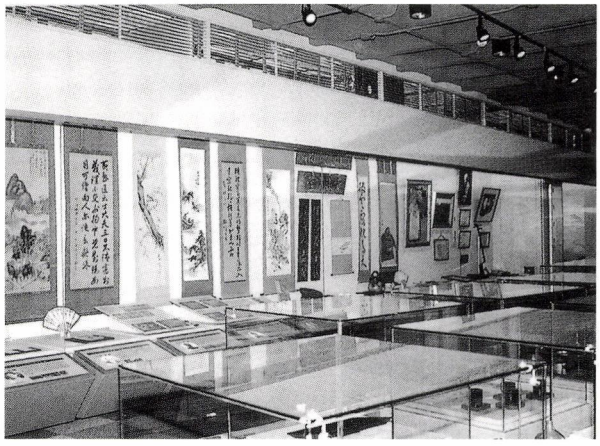
そういう目で芸術作品を見ますと結構渦巻きっていうのが出てきます。ゴッホの絵を見てもそうでしょうし、特にモダンアートは、現代哲学が何を自らに問うているかということを見る意外なヒントになるかもしれません。やっぱり芸術家というのは類まれな感性、次の時代を読んでいるわけですから、今は評価されないけれども百年後に評価される。上越は小林古径を生んだ地でもあり、いろんな芸術家がおいでなわけですから、そういうものを見ることでヒントが得られるのかなということです。

大きく、今までの発想を機能主義ということでくくるとすれば、現代哲学は構造主義の一言で言われています。構造主義というのは実態そのものではないということです。今ポスト構造主義とかいろいろ言われておりますが、やはり現代思想の基本は構造主義にある。これは本来実態そのものではなく、抽象的なものだということで構造ということを理解すれば、構造改革に対して具体論を求める方が実はおかしいんで、当局に求めることは求めるということなんでしょうけれども、一方で本来的な構造改革の意味が、「我々の精神的なものの考え方を変えないといけない」ということにあるならば、我々自らの生き方、考え方を変える必要がある。そういう発想は、まさに心身一如とか、知行合一とか、色即是空。死中活ありという、生きるということと死ぬということは全く相反する現象なんですけれども、こういう東洋の哲学は、アメリカではなかなか理解しがたい考え方です。

しかし、これからの現代社会を解くかぎは、むしろ東洋の哲学にある。この辺をヒントにといいますか、一つの武器という言い方は適当じゃないかもしれませんが、アングロサクソニズムに対して、本当の意味での日本の土着の思想を訴えていった方が日本の評価が高くなる、廻り道かもしれませんが、そういうことを言っていく必要があるんじゃないか、ということを向こうの知人と話しております。

ということでお許しいただきまして、この場を失礼させていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。（文責・編集部）

柏崎ふるさと人物館



展示館内部（人物館のパンフレットより）

旧図書館の建物をリニューアルし「柏崎ふるさと人物館」が14年4月オープンした。

産業・経済・社会貢献・学術・教育・スポーツ・芸術・文化・幕末の人物から計100余人。5年の歳月をかけ選定されたもので、全国各地の遺族やゆかりの人を訪ね歩いたという。

この種の展示館としては出色で、端から端まで見ても飽きない。田中角栄愛用の下駄もご愛嬌とはいえない展示である。

よくありがちな、ふるさと自慢ではないので、子どもたちが見たら自分のまちに自信と誇りを持つことであろう。

さて、わが上越にできるだろうか。

柏崎市本町一－四－十一
TEL／〇二五七－二一－八八一七
休館／月曜日
入場／無料

目見る（みるめ）

小林古径邸の美しさ

高田公園の中に「小林古径邸」が復原されて一年を過ぎました。多くの方々がこの建物に、懐かしさを感じられた事と思います。ではこの「古径邸」の移築復原過程と建築の美しさの一部を紐解いてみます。

「古径邸」は昭和九年に東京都太田区馬込に建てられましたが、時代の流れと共に、平成四年十一月に解体せざるをえなくなりました。このニュースに見学会、保存運動等が起きましたが、現地保存は難しく、持ち主の理解で、確実に移築復原出来るように解体されました。当時上越市にという話が出ましたが実現に至らず、平成七年に再度この話が持ち上がり、私達は埼玉の解体部材保存倉庫に調査に行きました。古建築の修復に携わる者にとって、この建物の素晴らしさと高度な解体技術は、強く感動させられるものでした。十六の市民団体の協力により市に陳情し、移築復原が実現しました。ではこの「古径邸」の美しさの原点を探っていきましょう。

大正の終わり、建築家吉田五十八氏は、イタリアのフィレンツェの初期ルネッサンス建築に強い感動を受け、建築はただ単に人間の知恵や能力以前に、民族や血統、そこの歴史、伝統が大きな影響を与えていると感じとったのです。帰国して、日本にも素晴らしい伝統建築がある事に着目し、これに近代性を与える事により世界の建築へ向かって行こうとしたのです。

建築に際し古径画伯は吉田五十八氏に一言、

「私の好きな家を造ってほしい」

と言っただけだと言われています。日本伝統建築の堂宮大工で、数寄屋大工でもある棟梁岡村仁三氏と組んで「古径邸」の建築が始まりました。

吉田五十八氏　四〇歳の時です。

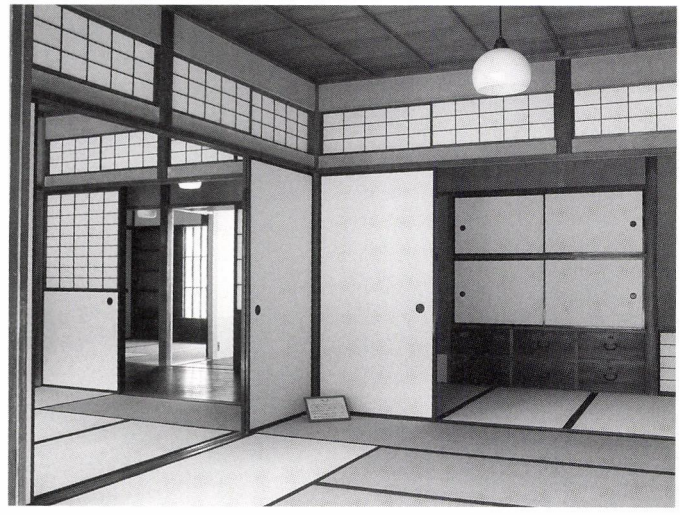
「古径邸」の外観は、京都八瀬大原の民家をイメージした、落ち着いた佇まいです。伝統建築の特徴の一つである真壁造りと新しい形の大壁造り、仕上げは壁面をリシン、木部を紅殻塗として新旧材料の美しさを表しています。屋根はゆるやかなむくりがつけられ、瓦の波（雁足）はどこから見ても直線に通っており、軒先は一文字瓦を用いて直線の美しさ強調しています。階段室の虫籠窓は京風の外観の美しさを表しています。

吉田流といわれる「近代数寄屋」を生み出すスタート点とも言われる「古径邸」は、伝統技法の中に五十八氏の主調である線の簡略化を見ることができます。柱は、一階は杉柾を主体としぼり丸太を用い、二階は磨き丸太を主体に使っています。玄関は昭和九年に新築された後、すぐに改築されていますが、最初に造られた時の形に戻されています。玄関を上がると中廊下の畳敷が一直線に伸びていいます。客間は唯一、書院造りの装いの部屋です。入口正面と左側は開口部で大きく開けられ、一面に庭の美しさが目に入ってきます。障子が閉められている時は、その障子の組子が全面に通っており、雪見障子のガラス面は押縁の入らない大胆な取り付け方で、開放感



小林古径邸外観と内部





を表しています。床の間は床柱にスッキリとしたテンカラの柾を使い、書院にはデザイン化された花頭窓と通し棚、大胆な組子間隔をとった障子、本漆は六分程度の光を放っています。居間・茶の間の欄間障子は「両面組子」になっており、どちらからも正面になっています。欄間の鴨居、敷居共に壁が塗り込められており、表面には表われていません。これは吉田流「近代数奇屋」の先駆けの特徴と思われます。柱は大きく面をとり、鴨居のおさまりは「ボルト貫工法」よる「面中仕事」が完成しています。

　このように「古径邸」は伝統数奇屋の手法のなかに、五十八氏の近代数奇屋の先駆けの手法が一体になり、美しさを表しています。線の美しさを追求する古径画伯そのものを表現した「住まい」のように思われます。画伯自身非常に気に入り、しばらく住まずに、

　画室から眺めていたと言われています。

清水恵一（しみずけいいち）文化財ネットワーク21

所在地　上越市本城町七－一（高田公園内）
TEL　〇二五五－二五－二四二九
入場　有料
休館　毎月曜

前号の特集「イントル、ナショナル、ヲイルカンパニー　エドウィン・ダン」に思わぬ方面から数々のご指摘や情報をいただいた。

かつてスタンダード石油に勤務されていた渡辺慎一氏から「イントル拾遺抄」の『日本アルプス』の所持者ジュリアス・コップマンについて、同じスタンダードの横浜営業所長であるが、別人のジュリアス・ハッパーであるとのご指摘をいただいた。氏からいただいた『一〇〇年のありがとう』（モービルの歴史）のコピーによれば、ハッパーは明治三五年退職して、後に早稲田大学の講師になり、浮世絵研究の第一人者として『ヒロシゲ・ザ・グレート』をあらわしている。

また、エドウィン・ダンの自伝の草稿が、北海道時代で終わってしまい、直江津時代に触れていない理由についても氏のお考えをお聞きした。

日本初の外資による巨大企業（それもロックフェラー率いるスタンダード石油の分身としての）をこの直江津の地に起こし、市民に新しい文明をもたらした、エドウィン・ダンをもっと顕彰すべきだと熱く語ってくださった。

東京ＹＭＣＡに在職されていた星野達雄氏から「ジェームス・ダン夫人の道子さんはＹＭＣＡ関連の学校で講師をされ、いつも和服姿で、男女生徒を厳しくしつけられていました。先生からは、北海道開拓のことや父上（エドウィン・ダン）のことなどを伺ったものです。なお、直江津製油所のことは伺っていませんでした」と以上のような手紙をいただいた。

上原校長のご子息上原勲氏からも数々の資料をお送り戴いている。

新刊の『上越市史』（資料編６・近代）に直江津町行政資料として、インターの公害問題についての資料が載っているのも注目される。

異色中の異色は、地域史研究家の村山和夫氏から、ダンをモデルにしたコミックがあるとのご連絡を戴いた。

大和和紀の『Ｎ（ニュー）・Ｙ（ヨーク）・小町』全四巻（講談社漫画文庫）である。彼女の得意とする明治の横浜やニューヨークが魅力的なコミックになっている。

その他、ダンから自伝の草稿を受け取って、郷土誌「太湖」に翻訳掲載し、ただ一人、ダンの追悼文を発表した滋賀県近江八幡市の西川芳之助という人物とダンとの関わりも見えつつある。

＊

今後もダンおよびインターに関する資料、情報、遺品などをお持ち方はぜひご連絡いただきたい。



ダニエル・アーヴィングこと
エドウィン・ダン
「N.Y. 小町」（巻１/講談社漫画文庫より）

■編集室から■

我々が日々眺める米山と柏崎側から見る米山は、まったく違う。明らかにこっちのほうがいいと思う。「ここだけの話ですが」と、渡辺氏に切り出したところ、柏崎と柿崎側でこの話題になると収拾がつかなくなるというお話であった。ひとつの山の民俗文化をまったく違う手法で両側の人たちが支えている。それが米山ではないだろうか。

高田図書館所蔵の古い新聞のマイクロフィルムの中から、祇園の記事の拾い読みをしてみた。まだまだ紙面が足りないくらいの面白い記事が載っている。読んでいると、約百年の間に、神に対する素朴な畏敬の念や、ばかばかしいほどの祭りへの熱狂が失われていくのが分かる。また、戦時体制下の祇園の報道を見ていると、意外に切実感がないのも面白い。

年間定期購読（四冊一八四〇円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

読者から

エドウィン・ダンは母校の直江津小学校の校歌を作曲したジェームス・ダンのお父さんということで、私たちは理解していた。

エドウィンという人物が、この特集を読んでようやく、母国アメリカ・北海道・直江津とひとつの糸でつながったような気がする。

直小のホームページを開くと校歌がながれてくる。ぜひ開いてほしい。

（卒業生より）

投稿募集

「直江の津」では投稿をお待ちしています。

本誌の企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、読者の研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが、掲載について、編集部で多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

第二巻三号（秋号）
九月二十日　発行予定

内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五五（四二二）九七一五
FAX〇二五五（四二二）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊「直江の津」夏号
第二巻二号　通巻六号
発行日／平成十四年六月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五（四五）〇二〇二
発行者／直江津信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する
　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津
　―中世都市・越後府中・　直江の津―　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ
　水族館に何を見るか　中村幸弘
フリースペース
　石痩庵主 茶人宗次という人　平丸誠

2001年6月　2号　夏号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ
　―直江津の産業史―　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」
　―囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町家の人形さま巡り
知の楽しみ
　妙高山　現在・過去・未来　早津賢二
フリースペース
　茶室見学ノート　石痩庵　佐藤昭夫
講演
　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治

2001年6月　3号　秋号（残部僅少）
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と
　南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ
　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース
　こんなまちがあった　八木登美男
講演
　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子
読書びと　『画家の妻たち』澤地久枝著
見る目　織部柳図徳利
私の直江津　分岐点　吉越泰雄

2001年12月　4号　冬号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔
ミニ特集　直江津路上観察
知の楽しみ　世界一の山脈　関田山脈　南木均
フリースペース
　こんなまちがあった2　八木登美男
読書びと　『宮本常一を歩く』毛利甚八著
見る目　どぶね
私の直江津　安寿恋しや　馬場和明

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー
　エドウィン・ダン
ミニ特集　同じまちなのに知らない“もの”ばかり？
知の楽しみ　能生白山神社　春の大祭と舞楽　土田孝雄
フリースペース
　「とんちん館」感傷旅行　濱田研吾
読書びと　『寺暮らし』『その日暮らし』　森まゆみ著
見る目　木造大日如来坐像
私の直江津　「ゴチ……？」　米山康久

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊

直江の津

発行／平成十四年六月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)